狗吹草

序

抑てて稗史小説の序文を完きたるは
ものを勧善懲悪に拠るべしとは養々の表
乃勝魔を破るをもて本位とするは
義のおもむきふかはきをその理を必きて
これをこの小冊とすべし曲亭子の八犬傳は
りくたる其始末のこゝろ拙きをもて
出伝節操奸悪殘忍あらはしその人物を

好稽古風流一世の人の友垣より聘ん[illegible]
[illegible]蘆明菴[illegible]老落心[illegible]
[illegible]人[illegible]其自[illegible]を解して能[illegible]の
旨を味ひなく[illegible]て[illegible]城清[illegible]乃
なりてかゝる[illegible]点其中[illegible]

文久三癸亥初秋

宝青居自人識

附言

今や八犬傳の世を限なく知[illegible]
の[illegible]実人物乃恢態も知[illegible]人を称[illegible]
けまて自[illegible]の[illegible]際[illegible]中[illegible]
嘆[illegible]の文を書出[illegible]は[illegible]たれ[illegible]霜胼胝
なりんのもはゝ事[illegible]善友の[illegible]
乃[illegible]せ[illegible]
晴れのたゝひりあ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]を揚んとせきたすこゝろ多輝まりて
いとゝうゝみ乘城ふもと繁きものゝ依てこゝを初輯等
一四義實父の送別をもうけて結縁の園をひられ
山下定包を討く房総の基を開くより第九輯百三四
父に親を南仁富山より四個の勍寇を拔くこゝろまでを
あくまらんとゝもをきもちゝ供もれ分秋のうちに或をさゝを
ひらて出吟なすもあれきはより終こゝもすくれの俤は
をこゝろ尉のたゝきをこゝろれを為潟もまゝ空ろ
乃美ひこゝろんもるこゝ穴哭

いとこゝろ

○里見義實

蘭相如の勇をもて夜光の珠いとうかゝ
もともかゝくくきハ口の過現禍の門ふ卧
す犬ハ身の仇なりき

飼犬ゝをを喝きこゝ彩與哉　為山

里見義成

弱冠なれとも文学武畧父祖ふ劣らも
ゝ民を撫国を治めて南總の藩屏ゝを
おもつゝゝ位もそれいはてゝゝみゝを　哉之雄

里見義通

豫准備の雑兵義通君を縛て
布嚢と銜せと城楼の柱ゝ扭着て
身をせめてなく音哀ふ父恋し　山英

安西景連

思ひよらなか義実の年の若きに
侮りて打見さるのゝ礼をかへさて
梅の実乃ふくみも色ふかしきくて　篤之

山下定包

滝田の城を更めて玉下とこれをなる
玉梓を嫡妻として後堂ゝ冊せ

みゝあるよ当をそりとる人ゝ夢やゝ書　樹石

蠶田素藤

茲事成就せん日まて高量歇ゝせま
わゝとまきまより妙椿を城内ゝ留めて
敢外へ出さす

月よりとりとるの樗ものゝれ　五休

扇谷定正

管領定正逢ゝ歇ゝ背を見る
よれけゝこて復て忠興ゝ怨の征箭
を受てるゝよと厚しめ

ゝあらゝなふれゝ桜こうる　稔市

○杉倉氏元

天い晴ても甲夜閤ふ月待まる遠
の便なき心頻よ集燥のせんもく
なきふ水行く

筆菊しろ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵 只青

堀内貞行

飯を炊せたるに雷雨烈しくなる
ふ日をくら〳〵かくの
彼処ふ
如く遅恭せり

おくれても船をかくるる月見哉 呂風

金碗孝吉

爹さま喃と声立て呼ぶ親い見る
はるを物いひけよ動せ〳〵唇の色
変り〳〵

ひとりぼっち面ら〳〵百合乃花 白起

蜑崎照文

安房上總い南嶋の尽処ふて
賢を招くに普ねよりて某主君
の密諚を奉りて封鑢を出て英士
を募む

君〳〵たゞ身もたゞ旅森うれ 新甫

簸上宮六

式欠故実欠きつねうも我よ熱醋
を飲せる情なりと怨きれい
燒つるゝ法ゝ力とてたゝ焼爲 永年

軍木五倍二
肉を爽あいあれ無慚や鹽ゆハ非ち
きていと黒ゆに灰染る東夢ゆと
ひとつゝまとうり

夏ゝあひの料理ゆ一紀月見弘 只青

姨雪与四郎
過世の業因深き故ゆや死ち之色
を得死ちて子供ち撃一つ

剰相応ゆゝ合巹
老ゆゝ松つゝ松の春 草友

十丈力二
二箇の色を共倡小拔きて見れば
こゝいに顕れ出し男の斬首

毛ち立てゆゝ世雪ゆゝ相一番 篤之

十丈尺八
忽地聞ゆる苦悩の両声焼と燃る
鬼燐の光りゆ再ひ驚く婦女輩

肥よちゝむ花火や変ゆいるよ紀 留太

馬加常武

何を独見うかまけ魂
言はるるおれよりに四天王寺を
召よして酒を飲せよ

郭燭よ酒の夢いやし行むとて　完碩

籠山縁連

刃の光りに身を反て毛野い持る
猛虎の頸ゆて楚と受住れいなる日
撃んとまと振抗る刃よ先ろ首級
の撃眼

まれいまてはんみを枯ぬ松の苔　禾暁

泡雪秋實

起んとする背膀席薦の塵埃を
排ふる如くこれ彼奇一打居られ

扨ままもせくちるる芒ときらきらと　涼荒

稲戸由充

首函引よせ共侶よ益を極遣り左見
右見て寔ふ是い記憶ある那荘奴よ
疑ひな一句是い正く犬田小文吾

芋の葉ふを巣と入せくるる工夫りな　敖行

川鯉守如

叮寧ふ機密を漏さて聚き示て
遠く懐より紙ふ糊る金十両と

種子嶋の小銃を出して

嘗乃大ろみを初吉のうゝ　稔市

川鯉孝嗣

二町ばかり先にて舁く親の亡骸の
轎子を走着んとて一鞭中る武者態
を迫る目送る荘丈小文吾

ゆくに石のうゝ傷ありけり　卜早

太田助友

蓬きく敵の逃足ふ武士の作法もいら
はるゝ思つい無益の問答なりきとく
踏込て討捕やと烈しき下知

先隊の雑兵

犬蓼をよあてをつよみや青嵐　思楽

○犬塚一戍

死期遠らぬ親ら痩腹今動に
かき切て汝を妹ふ托んを

茨ゝてのつよみもさゝてゝ名の木ゝ　留木

細干左母二郎

墓穴とてもゝの焼刃を認ゝるゆへあら
さるへ宝の山よ入なゝら他人の物ゝ
もくきとひゝゝちひゝを頷き

工ゝなゝよ技ゝふゝもよゝふゝ水馬　草友

氷垣夏行

既ニして夏行ハ大角ニ組伏られ有種ハ現八ヶ膝ニ布れて呻吟くのを反復さんと掙扎とも

追るゝく袖らひそゝねし木綿ヶ露　月夕

落鮎有種

心さま悍くして人の尻馬ニ乗るものならきてよく耕農を奨して資助となる事勘らねハ女婿養嗣と志てしに

新畑や子芋ならはせ来も親すちを　貫乎

○杣木朴平

原来ハ箭ニ射て落せし八人咲馬ゆへあらきアむら謀りし夏ハ飛鳥の鵰の翼を齟齬て

帆長くて牡丹落らせし帳のそと　鼓汀

洲崎無垢三

志ハ剛なれとも彼ゝ梟雄の智ニ勝ちとあらそ

ころあてあてゝころやしれとますます　稚市

大塚蟇六

鮮血の泥ニ尾を曳く亀篠四跂ニ蟇六逃迷ひ蛇ニ追るゝ七転八倒

枯葉みつまち繩もかけまくも　要乎

糠　助

心かつまい在りても人すい告さるまるて
の夏のく某原い安房の国

蓑　ぬ口のつのつ　梶乃命うる　五体

古那屋文五兵衛

一波動きて萬波皆従ひ細鱗踊て
巨魚あるを為る楽さいまく央なるす
とうんあやき放舟

沙魚釣やとつをつ　およよ獲物　太年

山林房八

荘官屋敷ふ捕つき　親の縲縄を解
んとかつ八信乃を搦めて吾倚ふ渡せ

そらきんと知くそを地又ん呼梅の面　永年

依　久

額の素きく八亡者の被る地蔵楮や
あくんきん背の高き八一袱の包物を
負るなり

死なて在く送出しく　帽　生　禾晩

暴風舵九郎

一叢黎き松蔭より顕れ出る一個の
癖者頭ふ手拭の糾鉾巻て腰ま

一口の短刀を跨

ぬ手をや惰よ薮板乃先まつを　芳草

鷗尾並四郎

悔の釣緒を断落つ登りかゝし

小横の上より彼行包を突と刺す

ふゝまつ人をすなり　鬼薊　永年

四六城木工作

七九の俞の邊より腹まで磯と撃拔

ゆさら両銃丸小雲時も得堪も

ゆの茅ゝ下よ伝ゝ　奈山ふ弓　花外

石亀屋次團太

地方の壮佼頭領と称られて闘諍の

和説なたい立入らそとう支なし

ゆゝうゝ似ゝれ　浩右も和ふうれ　波路

鯽　三

御下向の折を等て外ゐれやきそと

嚴ゐ示を詞へ雨露の恩受る轍の

鯽三ゝ江よ還りゆく不勝の歓ひ

嶽の筆ゐ事をしゝる人ゐ知ゝ終ゝ　稔市

○念　戌

奈四郎ゝ来さゝし前ゝゝ彼縁頼ふ

出て居り曝背ふ心地よゝれゝ儒半の

風を拾ひて

長時りや屋形卿云城門なるうら　五休

鐘　倉　壁

なるも迷ひと突立る杖に三尺五尺の
軀に浴せる付る郷武ら刀の冴いろ
世の別路

生姿ゆ川ゆ流らまつて牡し白西瓜　思楽

○童子簡子酒顛二

門の戸列〳〵敲かて主人次團太快
出よ這里に宿せ〳〵他郷の旅人

織れ松やうまきうけて紅水潟　卜早

媼　内

今宵の浄き是まてなるんに両個の
死骸を海へ流して牛と千住へ牽もて
やんもん身に宿所(還りねし

生ゆうゆや銭炮百合を抱なるうら　花布

鷲　鮮　坊

麻布の方よろ忽然と癖者五名連
立来て沼の畔に立在るる中に一個の
癖者罩頭巾目窟に戴き

茶碗ゆ乃うて来て本危惜し　也大

○假　一　角

某とても其事を思ひうるにあらねども
旧体を露さて親ふ似らん侭ちるを
頭掻捕んい快〻〻を

天爲やこのきて〻去はら〻〻その姿　太年

牙二郎

試撃手の夏まて知て如れい舎蔵また
疑ひなり〻先踏込て引摺出さん

山極ち命ち〻ら〻ちや人ら〻ち〻く　月夕

妙椿

齢千歳ふ近〻こい鄙語ふい〻虚詐
八百欠面白く形痩て雪を載る

呉竹の嫋やふて危〻ち

厚汁出〻た味ふり色社蔵まれ　為山

○箙大刀自

首級と俱ふ三口の刀と大塚石濵の
両城内へ遣さん夏勿論なり津衛も
這義を心得ふ

ち〻それふよ魚や出用の賜り物　新甫

蟹目前

心築石い遠〻れと這里ふ北野も外な
らて幣ふる神子ら手ふ鈴をふる夏
多き庭竈

孫を事乃多ましあれと放生会　山美

濱路姫

道俗諸彦の庇ふより実の親も我うへ
も定ふなし歎ひは就て悲く聚しき

やとりて木とも花くさとうよ知り危　鼓汀

玉梓

殺さん殺せ児孫まで畜生道ふ導き
て此世からなる煩悩の犬となきん

凍梅乃花くらう孫をこうるみ氏　新甫

○手束

親と親ろ許しる妹伏とはる

枚の嶺坂のうのまくら枕　芭枕　左年

亀篠

彼種々の聘物を題してかをて打
微笑をあれめてくの結納や

餅の名ろ身ちも与ろう小雀氏　波蕉

濱路

原来ゆん身はるらくう家兄欲仇ぞ
撃てのくるう思ひうはなき双抱い
逢ふとろれの今般の對面

耶かるう今日うして存亡をあん
身と俱ふせまありき

菱湯や蕩るとて蟬しき雨する夏ふ　敲汀

妙　真

僅ふ遺を樫の実のひとつとりて掛
替なき孫さん神ふ獲られを歎
そのまて待るべき

自やそしの秋をやうぬたれまき　芳草

沼　蘭

糸より細く目をひらき家兄ろ伏い
まし存命てろ世ふ憑しき誠心を説
明られ幾條

うつくしやそるるまちゑ年ゝ社　草友

音　音

熟ぬ手技ふ栲衾素樸定木の新
樵る鎌倉遠き不楽僑居

芙蓉やはちひゝおぼろ　老子　白起

曳　手

切てろより尾となりて良人の菩提を吊
キ年ろの夏の云ふ許させ

苅ちてゝちゝ行源ゝや青芒　涼花

單　節

現ろ夢の一年半夢ふ逢ぬ良人をの
只ろ比ろ思ふる歎きの霧ふ袖の雨

ちりて寒の懸り多き秋の達　呂風

雛　衣

十九の厄を一期みて非命に終る幸
なきも何憾むべき良人の為に功あり
といふる事

山吹みせよ伽しるを女郎花　きく雄

夏　引

牝牡無慙の癖者ぞ素より佛地を
憚らぬ寒風袿て春心揺動き
過さぬをよしとそ思ふ葉唄　完路

重　戸

況やろ六母刀自の忌日なりしをあん憤
に紛れて忘れるひ欲いて翌日まで
可責を禁め

乎しむや爰に夢のうち　稔市

船　虫

短刀晃りを引抜て右手に楚と小文吾
の衣領掻つかを引着て吭を掻んと閃き

白はえや人の油断　城吹　樹石

○犬　江　仁

里見殿に宿因ある八犬士の随一なる
名に豫知られる犬江親兵衛仁なり

あり住れやる喚りて走り出来る大童子
突然おそ〳〵おそ〳〵とすたす〳〵く山越き　溪窩

犬川義任

下郎ある亦五常あり主を撃せ奪ひ
讐を目送る法やある推なくて雌雄を決せん
義〳〵いさむ人やそ花さく庭幸る　樹石

犬村礼儀

言ちゝや畜生ち些の魔術ふ長たり
竟ふ漏さぬ天の網父の讐妻の仇
西休を見くさう〳〵牡る河豚うを　為山

犬坂胤智

はまり訛ふ笛の音ふ鼓の調打添て立て
あれる旦閑野ら態も體も美き
振袖と身を志つゝ百や花　衣　花外

犬山忠與

眉ふ秀て遠山の如く眼ふ朗ふて雙星ふ
似ら隆準丹唇是こそ一個の好男子
あくまでもくすと優美ちり容るの山　白起

犬飼信道

件の騎馬なる妖怪ふ左の眼を篦深ふ
射られて一声苦と叫もあ〳〵す
をこゝ〳〵う二の矢をつのす　懇　狗　芳草

犬塚戍孝

春なるゝ峰の霞欲夏なれ多の虹欲と見る
可ちるいと高閣の上にて苑を争ひ為体

実をやとりてもすはめさき　樓乃鶴　きく雄

犬田悌順

腋刀拿て腰に跨ゝ首級を右手に攫込て
、大照文に別を告信乃現に後の事

[illegible]みも[illegible]て　波路

八房

只惚々と姫の顔を臥て乃又起て
ろつ舌を吐き涎を流ー

目[illegible]ものみて　乃[illegible]　鼓汀

伏姫

経文読誦書写の功日数積れいうき
事も憂ふなれつゝしみて

行ひや雲の間乃なきてゝ　五休

、大法師

今より諸国を編歴て飛去る八の珠の
落る所を索ね求めはめの如く繋とゝ

ゆゝしくも雲ゝふまぬ　聖一のれ　新甫

通計七十四題
作者二十八名

八犬自賛既成開巻之歎
物案而小詩復賛之

犬誌元和絶妙詞 莫成俳句更新奇
猟腸個個吐名玉 又吸吟魂驚伏姫

遠中主人記

海内琴心庵

妻の歯乃人とせるかの姫 公成
ちつ耳よ巻之稗の新 有節
まさしくとせる青の物語 蒼山
ひるの風雨 於まつ知る美蓮 漁藻
綿弓 ちさえ百とせ雪の峰 島岳
夫こいつ神ちる家也年の内 芥舎
夢幻る巻や小夫の左り大 梅通

さそひまてぬよ入る新や蔵しな　素爾
帆のうんゆるるの穴あるいの蔵り氏　知風
りの影覚るは氏を鶴唄　潮水
掃溜て牡丹ひ以や料理屋　杜湾
寒うなりし出歩り雪ひ旦うれ　黍丘
晴やもを面の雪やうをし竹　掊翠

八月や小やもしいるる懸の内　袁多
墓桜や夜よゆ人を家の弱き　嫁城
多枕ひふをもつまりり変牡丹　宇夢
鶏鈴のちよつとうをを生り水　禾田
木ひるるりて来る氏れ月ひ氏　三お守

この秋と薬を のまん蔦を花　雯里
牡蠣や山うを加ひく通り町　柳壷

入梅時をまつや猫紅の長き種　丹嶺

形代やうしろ流る川　水圭

まつしろの夕雲出るし蓮うれ　悠平

四つ辻に風もかすむや麦の上　警眠

よい月よ涼しみや竹のゆき　清水

三度とる箸く筆や岩の花　柳皐

寒き夜を寒けうきたに寒る磨弓　契文

石菖砂を吸ふ音の一杉能　市猿

磨ぎ羽を書かすの扇の荘　遊古

はつ稲のちやめに法や相扇　吏川

寒きつや雲をみうの線山　五昊

沖へこく漁舟やうの雲のうち　文点

浮草生を芋殿をぬきてぬ安ま　李朗

おやもんをと辞すもしや親雁　古棠

雲間より拝く奥中松島や　童湖
出うけうら雪をつらねて　初給　渭川
切干や糸をる音も悠々と　雲底
四つの音や藤てのうつの相乃花　赤沙
桜なくや干うけてある法師布　省我
門桁へはきもむ卯杖やすうり是　其殘
枝葉の松蔭ゆ中や出乃鶯　而后

竹年や吹うへうつる波かしら　一清
ゆうつる来る新川や花水槿　梅狸
来て秋をうてゆをうて面白ひよ雲度　野変
ゆう鶏潮うく冒頭の雲や蓮の音　麥地

巻の山垂れ巻八巻ゆうつるなりけり　完伍
二梅うもゆゆ　枝なう多椿　蓮字
嘗太ゆ僧上の中一星　桑　枯水

乃人の虹彩うつる夏雪の邨　嵐雪
鳴やたえぬ山の井　秋の蟬　青溪
清くれぬよ名を邨よりも所を　月栖

烟中や実もちつつ梱乃香木立　可穆
月影や蓮の寒さ敲の水の音　梨軒
泡雪の沈の底の深よりも　樵山
夢よ花ちりてそれも色や牡丹　半雪

これ人の知るめる香のある清水ぞ　一瓜
軒のうすぶの下もれや牡丹烟　立宇
むら雨よ機嫌直しを祈る雲霞　為静
程ほどの田よりの乃自山松の影　磯山
蓮池の水ほの玉石や五月雨　蒼波
百家乃風うつる堤の家　洗吉

[illegible]　緑淨
[illegible]　水行
[illegible]　御風
[illegible]　素山
[illegible]　静潤
[illegible]　鶯中
[illegible]　花堤
[illegible]　嘯風

[illegible]　晴雲
[illegible]　清民
[illegible]　壮山
[illegible]　六槐
[illegible]　自省
[illegible]　草吾
[illegible]　江之

流れぬる水はまことの奥こそ　柳　仟兮

面の百合をもとめおくるまとて　一兮

面もうつるうつくしき鏡　梅成

永き日のなごりの雪しらの山の百　芳塢

秋の露ゆゆしきまでの菊　風止

澄む新を笑ふまことの奥の川　左竹

秋のもとめてさはる柳　一止

雪まれて花ちるあとの夏小家　布山

百日や木の百尺遠き舟　鶴高

ちるまも雪の新あり秋山　新多

小一月森ひとつ西にうつる　梅渓

仲の子と市に出でて妻の雪　松園

梅ちるまでくらす世の富この事　其骨

某とるなるべし肥みも羽樗　梅二

面もたゝ一瀑のみ梅白　精笑

時雨の野と知るは雲やそれ　此一
春風やあらぬ変の寄居虫　錦苔
枝ぶりの細の水鞠やちり嵐　一儀
秋舟の弛きもうやう書の月　之帛
ちるもうち　樹のうちを初雪　賢之
寄り来るもうれを人まの夢のうれ　石流
水煙城かき出しそつる蚊帳　里桃

吟ふるす蛙乃興ゆ水鞠の家　南溪
まるく魚とうれを白魚菜　南江

家あまて両鋼ゆ　一本古香　峰秀
鞠挽ゆ　ちきゆ　蛍社清蛍　柳等
立ちれを吉ひとうぬ鮫のれ　まの丸
葉のもや蒼ゆ　ひとつ星　悼起
朝寒やはつうの　聖葉市　正波

菊を見て自慢する家の菊見かな　一鼎

家自やうしやの吼る浦の犬　揺雪

鐘を待い耳も入らぬ弱　已有

仮摺を言ひ通すなりけるる　芹雁

却りもせぬ戦くあまを女房哀　あや猫

日の光ぶりと伸て空を春　椿山

長陣の馬をぬめり月出られ　乙鼎

ふるまをまを色て持なれ瓜の花　奥岳

光ぬまてんかうつる絵こう雑　米富

庭師も盃とる寸新酒うな　みく理

見なくして空をこの秋の雲　潤屋

ちく風のちちくまでの川原の事　姫光

なる程やうの写よも鮫の手際　未爽

歩やめてきけたる自なり小春鳴　渡水

蒔水すはめて源〳〵門の石　其翼
秋立てゝ夢のかゝはや影乃香　米守
撫る墨と序減のてゝ夢如　蓼義
雲霧降勢されのゝ臨身宮　成章
水音と森ゝ静ゝ夜の月　巣欣

山乃吉ひをつゝむわの紫　旭高

ものゆゝ菴乃字ゝ社為る也　可候
紫桜やいとも花ゝ勢撫寵　西翁
新の多なゝひ習ふゝ留取　寿年
新彩や地も木の芽を保ふ夢　月杵
けゝとゝの色も蛙ゝ柳こゝ　蕉山
田を見舞ゝ人事ゝ乃ゝの秋　柄翠
移ゝ日や降やもゝ鳴る下ゝ　由儀

落て老の涙扇やみなり　鉈河　溪高

夕このほや酒のたなのはをも　雲　素道

紙墨会や蜂うたてたなる幾御　花山

蛾るるや星をさ刻とるる燈　其彭

星会やまゆくるるよ灯のうゆる　魯雪

紙煙の煙をあてる弱線の南　五渡

秋風や野を延を乃ほくく吹　涼花

山をやゆ金をゆるみ田乃墨　梅賀

なるの光乃見てるるや梅作紅　象旌

川しかるを山り落水　弟角

水り新うして半扇うれ　男函

四うう田人茂るる音や花　蕾　其誠

絹りく枯木より乃を夫れ自　赤巳

まるおの野まるあるの柳式　松朗

田雀囀や梅もてまゐる日の匂ひ　榮郎

音のして燈ともや秋乃故郷哉　良可

ちるほゝ大ぶ外まをうつる百合の　洒蝶

松原ゝ口ゝうつる月の蔭　欣月

帳の飯ゝ敷物や柳如く　華也

夕月や夕鍋ゝの陰対哉　賜酔

ゝ哉ゝなるれと蛙ゝ寺ゝの秋　曲川

むら雨や水田ゝ秋月ゝ百　為山

徐の山ゝ昔ゝのけゝ玉ゝの　太年

就猫ゝ家ゝ寺ゝや朝夢哉　可嘯

尾やゝゝゝひゝも秋の奥ゝれ　雪年

徐ゝれと伐人拝ゝや枯ゝ哉　普乃

出ゝゝゝ霜ゝゝ渡ゝ　山英

つゝゝて烏ゝて懸の初ゝ式　山台

尚原の田ゝみちゝ原ゝ　弘美

世をあれて実あらひも法さく
穂よ出て山淺くなる芒の野　在菅舘　葱玉
皆脱のみも洗ふて星ひ　卓郎
芦沼乃なるはを枯て時の拜　成位
星あひや月をさきかよ香ひ　香城
蕎麦や稲の面ひ明て　永機
出されも新も穂よ雑炭ひ　費乎
身ぬきても知らぬ秋の風　菩城
　　香香

森てゝや山の西城時なるゝ　見外
気ものせてゝおきて乃野ふ　禾暁
宝稲の麦や一宝麦粉て沼ゝ名　等栽
翅板も洗ふ小家や星むひ　苣麈
暁の面てゝやむ一乃雪　荷少
人あて雪結て乃沼や降霞　黙平
雪押のはつゝや橋の雪ゝ一　窠暁
風ふよ雪小鶴やゝ新雪秋　妻湖

はつき朱の盃ふりそそれて初歳　水壺
盃うかべや時雨ちるとてもあれ毛　祐之
今はを雲ゝ雪よ桜ゝ八重桜　如白
杉葦やちらえらまてもえつゝ寸　徒然
きやもゝす浮世ゝきはゝ物ゝ　孤登
池ゝそれ枝のうねり物　風彩　蘇
外のもやうゝ泉岩乃ゝ　草友
移きりや添ゝ朱の色　草番
芳草

春々ゝそれゝ若初る柳　この形
雪きれや和の毛袋ゝそれゝ　雪井
鉢木ゝ雪ゝ埋ゝれゝ　弘湖
面影の春ゝ花ゝ　五雀
外ゝ能乃ちゝ雨ゝ月の月　素蓬
下ゝ雪ゝ出ゝて枯ゝ日南ゝ　浮水
新風の景ゝ人出ゝ　秀壽
時ゝきゝ春ゝ花ゝ　明水
ゝ玉雄

あるよりと言くらうあるを聞の郭　宇山
初あらし岩のうけ口和とうゆる　遊止
糸卅の木ゝとゝろまず〳〵野ゝ水　南之
待あつる迄ゝ迄ゝ色や山の色　西地
冬の山ゝゝ雪きゝ雪ゝ雪ゝけを　相高
雪艶つる殘花ゝつ乃弼緑茅　乙五
水ゝゝゝゝや野ゝの吹たゝみ　範水
ゝゝ雪ゝ唾ゝあゝ蕾の雪　好以

霖ての雪の花の山て　不染
七夕や旅人出ゝゝ磯ゝゝ　永年
水汲ゝはつゝゝ舟ゝ敷生ゝれ　小雲
梅のゝく三合ゝれゝゝ和　孝泉
更ゝ新なくて霖ゝれゝゝの月　當室
雪ゝ此寸や屋風ゝゝゝゝ　宮和
工ゝゝあゝに高ゝ雨ゝれ　青南
旅人乃ゝは迄ゝ出る踊ゝ　木和

月の出城跡のうらや明の荒　きく燈
ゆかしき宮きく塚もとくうれる露ふる　甘志
森るつきの末く秋の秋ちる夜ゝ　思樂
雲ちるうかもむ山路や市の夫　葉操
ちんそなてなく鹿やき嵐　閑賀
口あらゝや磯の時雨乃袖ちする　伍柚
秋の蟬人ち葉力ゝ塩ふり　甘菜
ゝ度ちれ雪ふる宋や妹の書　芳泉

森ゝ影ち人ちゝとめて月今宵　完鷗
ゝれうゝや神楽の佳ちと仏太　抱叔
雪つゝる牧笛や門ち月ゝすす　篤之
燒のうゝる方ちなるめて冬荒　如椽
あゝ新や市ち見ゝ後家ゝ咲　花外
樹の撫乃ゝ月ゝ見ゝ後異ゝれ　月夕
森特ゝやるゝ壱お夏の月　呂風
涼ちゝてあゝ面や明ゝ　只青

[illegible] 卜早
[illegible] 波鷗
[illegible] 也大
[illegible] 留木
[illegible] 柳
[illegible] 可乙
[illegible] 樹石
[illegible] 起

四嶮　五休

[illegible] 敷汀
[illegible] 新甫
[illegible] 稔市
[illegible] 汀
[illegible] 休

ウ

組内と若き者共一堂に集り昔
茶うす茶乃家内る拍子
御点よりかれ人数中る袖
なるべくてもまた結納の品
小城下の不和けと二本松
肥ふたにてまと知れ麻百
四り強うけて酒のむ朔日
茴香の寒きもの

市
甫
休
汀
甫
市
汀
休

秋沢の村方畳乃数あるせ
法つきて来る称宜の借
山まこう花も咲うくえてまつ
茶代へ出く水上を呼く
門もうそくもの系統系東
手拭とりて拵あける饗
うま人よたのうまを面中
川部一宴八幡の鐘

市
甫
休
汀
甫
市
汀
休

ちらちらと降る雪に仕舞ひ
踏て、捨つて戻りいそく　市
金剛寺にて物志ひめの菜の四幾
ゆくさかに迷入る蓮の色　休
うるたちのもとも以ぬ雲と蛭　汀
水貝洗ふ夜をきそ水きき　甫
いさゝめる月の光にうむ孤蓋　市
芙蓉の下に水引ひも　汀
　　休

焼ほろなられた寺跡一やど　市
病後の夜よ美うむ孤りの　甫
扶持乗るひのみを洗ふ軟を　休
落をおうせる孤馬の鄙く　汀
咲花をいとかしみの孤生宮　甫
立ちるは新をおるるる帖　市

うしろ見るこころは月と交りて　新甫
人うせの拜のこと到きて　けるる　鼓汀
おもなかよ言て　鳴るる　雪よきり　稔市

稔鼓　西見ところにて書畫をそのかて
この小冊をはこの花鳥数こて
手まのせくはくしくこうこいのこ　叫　五休

追加

賣跡る馬　跡りて　根を　永き　イセ　蒲柳
春を　根も　蛾り　山根の　杜宇　抱節
麦秋や　舟うう　軍ふ　白　飼支　交　和水
芸　中　故　つ　山家　千里
赤　赤　蒲　の風　秋日　和　梅園
舟　を　仗　て　反　月　ミナノ　庭雨
はう　遠　の　言　秋の　白　ヒタチ　扶谷

り燈の像掃や後の月　庵遊（オク）

烏帽子着て酒雲る神の霜式　桂傳（テハ）

小袖着て瓜とる九日ころもうれ　里三（ユキコ）

白風をなきあひや神送り　壽村（カヒ）

野巾着ぬりや知る人ぬる人　其旋（ムサシ）

名月や燈ともおとる川きぶり　柳圃

稲妻や沙弓とる花は売　貴久（エト）

着ぬとく素の光ぬるや浦の月　いと女